

# 団員が感じたこと

## 初めての外国で学んだこと

川辺高等学校 2年 小宮 那々花

私は、スリランカと日本の食文化の違いを知りたいと思いこの研修に参加しました。

私が研修に参加し、印象的だったことは、3つあります。

1つ目は、スリランカの方々の体型です。現地の人の体型は、お腹だけが出ている方が多かったです。私は、ホームステイの中で、その原因が理解できました。ホームステイ先では、毎回の食事の後にお茶を飲んでいました。そのお茶は、コップ一杯のお茶に粉ミルクと砂糖をたくさん入れたとても甘いお茶でした。それを毎食後、1日3回飲み、その他にも、お茶の時間があり、甘いお菓子と一緒に食べます。その他にも、お友達の家へ行く度にお茶を飲みます。私は、これらが現地の方のお腹が出てしまう原因なのだと感じました。実際に、青年海外協力隊の保健師の方から現地の方の体型なども気にしているとお聞きしました。

今、スリランカでは、生活習慣病が問題なのだそうです。生活習慣病の問題は、大人になってから、改めようとしても簡単に治るものではないので、保健師の方は、小学生に検診を行なったり指導を行っているようでした。

2つ目は、交通事情の現状です。道路は、舗装はされているものの中央線がないところもありました。一日中ずっと車のクラクションが鳴り響いていました。ずっと鳴っていたので、なぜだろうと思っていると、止まっている車に危険を知らせるために鳴らしていました。日本では、クラクションを鳴らすことは滅多にないことなので、スリランカに着いた時はびっくりしました。また、電車は窓がなく、ドアもありませんでした。だから、ギリギリで乗りこんだり、身を乗り出している人もいました。線路と道路を仕切るもののがなかったので、線路を横切って向こう側に行く人もいました。日本に帰ってきて私は、まずクラクションの音が聞こえないことで、日本に帰ってきたのだと自覚しました。

3つ目は、スリランカの人々と環境です。会う人会

う人が親切にしてくれて、村の人達も私たちのことをとても歓迎してくれました。私は、シンハラ語が通じるか不安でしたが、言葉が話せなくても、表情やジェスチャーなどでわかつてくれ、とても過ごしやすい日々を送りました。

また、日本では、当たり前ということができないこともあります。日本ではシャワーはお湯が使えますが、スリランカでは、お湯は出てこず、冷たい水でした。もちろんなかなか慣れなくて大変でしたが、これも貴重な体験でした。

研修を通して、私が日本で生活する日々は当たり前のことに思っていましたが「それは違う」ということを改めて感じることができました。現地に行き、実際に体験した人にしかわからないことが、沢山あるということに初めて気づかされました。

そして、私たちがスリランカに行くためにこれまで支えてきた方々に感謝しています。そして行く前までは、不安な気持ちでしたが、今はとてもスリランカに行きたい気持ちでいっぱいです。



現地の小学生と一緒に 本人：左から2番目



スリランカの交通の様子

# 「目標」を見つけ出せた研修

川辺高等学校 2年 鮫島 舞雪

私がこの鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加したいと思ったのには、大きな理由があります。私は将来幼児教育に携わりたいと考えているからです。私達が受けた教育とは違うのか、子ども達はどのような環境で成長するのかということを疑問に思い、自分の目で見たい、感じたいと思い参加することを決めました。

私は、将来のためスリランカの子ども達と触れ合いたいと感じていました。そこで現地の交流会で発表する折り紙のリーダーになりました。折り紙が子ども達に伝わるのか、一緒に楽しんでもらえるのか不安でした。他にも、子ども達に「自分が一番好きなもの」というテーマでお絵描きをしてもらうという計画を立てました。

現地のヤタワカ小学校で折り紙を披露した時です。私は大きな折り紙を使い、折り鶴の説明を行いました。子ども達にも声をかけ、一緒に折ってもらいました。しかし、スムーズに進みません。子ども達は折り紙に触れるのが初めてだからです。私も説明するだけでなくサポートにも回りました。最後、完成するまでに多くの時間がかかりましたが、作品が完成した子ども達はたくさんの笑顔を見せてくれました。子ども達へ事前に作成した折り紙をプレゼントすると子ども達は折り紙の文化に夢中のようにでした。嬉しそうに受け取ってくれたのが心に残っています。

計画していたお絵描きは村の子ども達にお願いしました。テーマ上、おもちゃやアニメのヒーローを描くのではないのかと予想していました。しかし、スリランカの子ども達は周りの自然や動物などを描いていました。

この経験を通して学べたことがあります。折り紙で学んだことは、平面から立体を作り出す楽しさです。初め、紙だけでは作れないという雰囲気がありました。完成した時、子ども達はキラキラした目で見てくられました。

次に、お絵描きで学ぶことができたのは環境の違いと感性の豊かさです。私は、今の日本の子ども達はテレビやスマホなどといったインターネット機器などに囲まれながら生活していると感じます。そのため予想

はおもちゃやアニメ、ゲームといったインターネットが関わっているものでした。また、感性の違いは大きかったです。スリランカの子ども達は自然がある環境でのびのびと育っていると感じました。日本の子ども達はインターネット機器の発達により生活が楽になり、楽しさを求めたり、きっとこれが関係しているのだろうと考えます。これらは私がスリランカで学ぶことができたものです。

今回の研修を通して、改めて幼児教育に携わりたいと強く感じました。平面から立体を作り出す楽しさをたくさんのお子様に知ってもらいたい、楽しさに気付いてもらえるようサポートをしたい、一人一人の感性に少しでも気づき伸ばしたい、支えていきたいという思いが出てきました。私は今まで幼児教育と言っても何がしたいのか、何を学びたいのか悩んでいましたが、今回の研修を通して、私は大きな目標が見つかりました。子ども一人ひとりにしっかりと向き合い、伸びていく子どもを支えたいということです。目標が見えていなかった私にこの研修は目標を見つけるという人生の大きな選択になりました。その目標に向かうためには自分が今何をするべきなのか考え方行動し実現していきたいと思います。



現地小学校との交流の様子



お絵かきをしている現地の子ども達の様子

# 団員が感じたこと

## 初めての経験

川辺高等学校 2年 今村 心美

アーユボーワン、マゲ ナマ ココミ。

私は、異文化を自分自身で体験するとともに、日本の文化を現地の方々に紹介したいという思いからスリランカを訪れました。

スリランカの方々はとても優しく、街中で目が合ったときには、みんな笑顔を返してくれます。スリランカでの約1週間の生活は、毎日が新鮮でとても良い経験になりました。特にホームステイ中の4日間は、初めて見るものや体験することばかりで五感をフルに活用しました。ホストファミリーは、全く知らない日本人の私を温かく迎えてくれました。そして、どこに行くにしてもずっと手を握って引っ張ってくれたり、私が伝えようとしていることを一生懸命理解しようとしてくれたりと、4日間という短い時間でしたが、スリランカの方々の優しさや心の温かさを感じました。

スリランカを訪れて私は、その土地に住む人々で幸せのかたちは、それぞれ違うということを初めて実感しました。出発前、私は「スリランカは発展途上国だから国民はみんな貧しい生活をしているだろう」と思っていました。しかし、空港を出ると日本車が走っていて、高いビルや建設中の建物があり、私の想像とは全く異なりました。

そして、私はホームステイを通してスリランカの日常の文化を体験しました。私がお世話になったホームステイ先は、エアコンがなかったり、シャワーやトイレが外にあったりと、不便だと思うこともありましたが、それは日本から来た私だけであって、現地の方々にとっては当たり前の生活です。他にも、朝はスクールの音で目が覚めたり、村人同士とても仲が良かったり、1日に紅茶を何杯も飲んだりすることはスリランカの文化であり、ごく普通の生活でした。実際にみんな不自由なく毎日楽しそうに暮らしていました。私も3日目くらいから慣れてきて異文化を体験することにわくわくしていました。そして、私はこの経験から、私たちの日本での普段の生活は当たり前なものではなく、とても恵まれているということを再認識しました。

また、私は今回の研修中にスリランカと日本の歴史についても学びました。

「憎しみは憎しみによって止まず、ただ愛によって止む」これは、1951年サンフランシスコ講話会議にて、ジャヤワルダナ元大統領が言った言葉です。この言葉によって日本分割占領案がなくなり、日本はどの国からも支配されることなく、現在私たちは日本で生活できています。私はこのことを知り、スリランカと日本の深い関係に感謝すべきだと思いました。また、日本人でも、この歴史を知らない人は多いと思います。より多くの人々にこのスリランカとの歴史を知つてもらいたい、これからスリランカの発展に向けてスリランカとの友好関係をさらに深め、日本は、もっと協力していくべきだと思いました。

最後に、私は鹿児島県青少年国際協力体験事業に参加させていただき、本当に貴重な体験をすることができました。発展途上国の現状を生で見て体験し、実際に青年海外協力隊の方々のお話を聞かせていただき、私も将来青年海外協力隊として、途上国の発展のサポートをしたいと考えるようになりました。また、今回の活動を通して自分が見たこと感じたことをクラスメイトや地域の方々など、より多くの日本に住む方に伝えたいと思います。そうすることで、異文化交流や発展途上国の現状について知つてもらいたいです。

ストゥティ、



ヤシの実ジュースを準備している様子



ホストファミリーと一緒に 本人：左

# スリランカ研修で変わった自分の夢

鹿屋農業高等学校 3年 福田 正宗

スリランカでの研修を終えて、私の夢は変わりました。それは、将来自分の身につけた知識や技術を用いて、海外で安心安全な茶の生産を行い、さらに健康増進に役立つような商品の開発に携わる仕事に就きたいということです。もともとは安心安全な茶を生産する茶農家になりたいと考えていたのですが、今回の研修で得た二つの経験が、私の将来の目標を変化させました。

一つ目は、ホームステイでスリランカの食生活に触れたことです。スリランカの主食は米で、スパイスを使用したカレー味のスープと一緒に食べました。また、間食が多くお菓子は砂糖をたっぷりと使った甘いもの多かったです。さらに、カップ一杯の紅茶にスプーン3杯の砂糖を入れて飲むという習慣がありました。現地の学校との交流で日本茶を振る舞った際にも、砂糖は入れないのかと聞かれ、私はスリランカの食生活に驚きました。研修の中でスリランカの人々の健康状態について聞いてみました。するとスリランカの大人は肥満率がとても高く、この国の健康状態には課題があると感じました。

二つ目は、保健師の長部隊員の活動を視察したことです。長部隊員は主に食品衛生予防、感染症予防、生活習慣病に対する健康教育、保健指導を行っていました。子供にはダンスで体を動かすことを教えたり、大人にはメタボ予防や、その後のフォローアップというように、年齢によってアプローチを変えていることも知りました。長部隊員には、青年海外協力隊になろうか悩んでいた時期があったそうです。その時に先輩が「行かないで後悔するなら、行って後悔した方が良い」と言ってくれて、青年海外協力隊になろうと決めたそうです。視察の最後には「あそび心を持ち、自分の可能性を信じてください」とお言葉をいただきました。このことから、私は海外で自分の知識や技術を用いて、発展途上の国々や地域の人達の役に立とうとしている隊員の姿に強い憧れを感じました。そして、自分もこ

のような仕事をしたいと感じました。

このような経験から、私は将来海外で安心安全な茶の生産を行い、さらに健康増進に役立つような商品の開発に携わりたいと考えるようになりました。

今回の研修で、私は初めて海外に行きました。不安はとても大きかったのですが、スリランカの人達は、とても優しく私達を迎えてくださり、そのおかげで充実した研修をすることができました。特にホストファミリーは、私を家族のように大切にしてくださいました。また、スリランカのヌワラエリアという紅茶の产地にも連れて行ってくださいました。このことから、より発展途上の国々の役に立ちたいと思うようになりました。このような人々の優しさに触れたことで、より農業に詳しくなり、知識や技術を習得し、将来現場などで活かして、多くの人の笑顔を守れるような仕事をしたいと考えています。



茶畠でホストファミリーと一緒に 本人：右



現地の子ども達と一緒に 本人：中央

# 団員が感じたこと

## スリランカに触れて

鹿児島高等学校 2年 今別府 幸芽

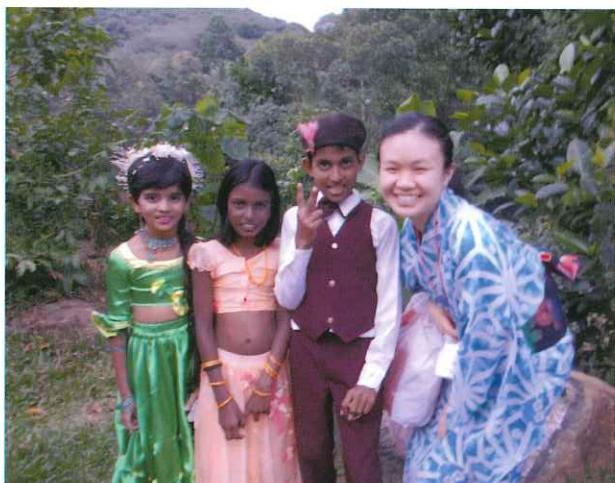
私が、スリランカに行って一番印象に残っているのは子ども達の笑顔です。

自由行動の日、偶然親戚の子ども達と遊ぶことになりました。子ども達は林を自由に走り、声を上げて、本当に楽しそうに笑っていました。気づけば私も彼らに混ざって遊んでいて、今までになく楽しかったのを覚えています。

これまで年下の子ども達と交流がなかった私にとって、それは、大きな出来事でした。日本に帰ってきてからその事をよく思い出していましたが、最近では彼らのような眩しい笑顔を沢山の子ども達から引き出したいと考えるようになりました。これをきっかけに自分の将来についてもう少し深く考えてみようと思いました。

青年海外協力隊として派遣されている山尾さんは「スリランカの人達は、他の外国の現状を知らないから自分達が一番だと考えていることが多い」と仰っていました。スリランカの人達の意識の違いを大いに感じましたが、それ以前に日本から見ればあれが無い、これが無い、というものは、スリランカに無くても幸せな生活ができる、という事実がありました。そして実際、物が無くても良い生活ができるものだな、と受け入れられる生活を送ることができました。スリランカでの生活から、日本は便利すぎるのかもしれない、と思うようになりました。日本は他国から沢山の物が伝わり、急速に発展し、利便性・効率性を求めて1日1日で何かが変わっていく生活です。スリランカはスリランカの独自の文化があり、何かが足りない、不便だ、と感じることのない安定した生活を送っています。2国を見て、違いはあれど、それぞれがその国の幸せであるということを、相手側に立って初めて気づきました。それは決して相手を下に見て、可哀想だ、などと思いながら気づくことではないでしょう。この研修で他国への視点の置き方、自分の国の考え方など大きな変化がありました。

こうして素晴らしい体験に参加できたのも研修に行くことを快く承諾してくれた両親のお陰です。一週間無事を祈りながら待っていてくれた両親にはとても感謝しています。また、スリランカへ行くことを後押ししてくださった顧問や先生方、面接の練習をしてくれた同級生達、昨年の経験を伝えてくれた友達、習い事の先生、本当にありがとうございました。2回の研修と7泊8日という短い期間でしたが、団員の皆さんには色々な相談にのってもらったり、たくさん話がでて、意見の交換や思い出をつくることができました。同行者の方々のお話は、自分の為になることだったり、自分の将来を考える時にも参考になる意見がありました。たくさんの方々に支えられて、成長できました。関わってくださった全ての方に感謝を伝えたいです。



現地の子ども達と一緒に 本人：右



ホストシスターの2人

# ぼくの挑戦

赤徳中学校 1年 德永 隼也

「言葉が通じなくても音楽で心が通じた。」と担任の先生が、ミャンマーの中学校で音楽を教えた話をしてくれた。僕は奄美の伝統である島唄を習っている。僕も大好きな島唄を紹介し、外国人の人と交流してみたい。そして、海外で活躍している人の様子を見てみたいと思い、この事業に参加した。

僕は、初めてのホームステイに不安でいっぱいだった。ホストファミリーとよく話せるか、生活に馴染めるかとても心配だった。

「アユボーワーン。(こんにちは)」

ニコニコして温かく迎えてくれたホストファミリー。早速覚えたてのシンハラ語で自己紹介をした。何とか通じてうれしかった。でも、その後の話がつながらなかった。伝えたいことがあるのに言葉が分からぬ。伝えられない。気がつけば、一人でボーッと座っていた。そんな時、僕を助けてくれたのが島唄だった。僕は三味線を持ってきて、島唄を唄うことにした。みんなが不思議そうに見てきたので、なんだか胸がドキッとした。でも、自分がまずは楽しく唄うことが大切だと思い、思いっきり弾いて唄った。すると、初めて聴く島唄に合わせて、手拍子をして楽しそうに聴いてくれた。

「ホンダイ(いいね)、ホンダイ」

とみんなが笑顔で褒めてくれた。ぼくもホッとして笑顔になった。それから、ホストブラザーに三味線を教え、家族とも会話が広がってきた。おまけに、近所の人までたくさん集ってきて、いつの間にかコンサート会場のようになっていた。島唄という音楽を通して心が通じ合えた。そして、何よりもうれしかったのが、僕の周りに笑顔がいっぱいにあふれていたことだった。

僕には、将来医者になりたいという夢がある。青年海外協力隊として活動する保健師の長部さんの視察はとても興味深かった。コロンボ市内を見渡すと高層ビルが多く立ち並び、医療も発達しているのだろうと思っていた。しかし、長部さんの話を聞いて、スリラ

ンカの医療の現状に驚いた。実際は医療技術は低く、十分な器具も治療も受けられないのだ。スリランカに派遣されている日本人も、病気にかかったら日本に帰って治療するのだという。僕は動揺を隠せなかった。世界には、恵まれない環境の中で生活している人がたくさんいる。僕は、発展途上国の医療をもっと知りたい。そして、病気で困っている人を助けたいという気持ちがますます強くなった。現地の人に溶け込み、共に働く青年海外協力隊員の姿を見て、僕はうらやましく思った。まずは、相手の文化や習慣を理解し、受け入れることが、国際理解への第一歩になると思った。

僕はこの研修でスリランカの人の温かさに触れ、自分を見つめ直すことができた。将来は青年海外協力隊の一員になって、世界中の苦しんでいる人々を助け、たくさんの人に笑顔を与えられる人になりたい。そして、いろいろな事に挑戦して世界に羽ばたきたい。ぼくの挑戦は今始まったばかりだ。



ホストブラザーと一緒に 本人：左



島唄を通しての交流の様子 本人：左

# 団長報告

## 第27回 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会  
事務局長 弓場 秋信

香港経由で真夜中のコロンボ国際空港到着から一夜明けたホテルでの目覚めは眼下に広がるインド洋の波の音と、車両の連結部分まで乗客を乗せて海岸線を走る鉄道の汽笛であった。朝食会場で団員を待っていると、みんな元気にシンハラ語で「アーユーボーワン」(お早うございます)と返してきた。

活気あふれるエネルギーッシュなスリランカ最大の都市コロンボを離れ、内陸部に位置するホームステイ先へと向かった。途切れることのない建物・行きかう車、40数kmの距離を2時間近く要し、緑に包まれた農村地帯ウラポラ地区ミーガルラ村に到着した。団員同行者の顔写真が印刷された大きな横幕に迎えられホームステイ先との対面式に臨んだ。

移動中のバスの中で、現地で披露予定のスリランカの歌を声高に歌い笑顔が見えていた団員は、これから始まる一人でのホームステイを前に緊張と不安な様子がうかがえる。迎えの家族と一緒に夫々の家路についた後、全ての家15軒を訪問した。住環境のチェック、団員の様子伺い、そして受け入れ家族への感謝を伝えるためである。団員は「指さし会話帳」を使いつながらシンハラ語とジェスチャーで自己紹介や持参した土産・写真等で家族と楽しく過ごしていた。

ホームステイ期間中に、動物学で青年海外協力隊員としてコロンボ市郊外の国立デヒワラ国立動物園で活動中の山尾紗代さんの現場を訪問した。民族衣装サリーをまとい出迎えた山尾さんの案内で動物園内を見学。担当である動物の食について説明の後、日常生活や協力隊参加の動機等について話してくれた。そして質疑応答では時間の関係で団員からの質問にストップをかけざるを得ないほどであった。

内陸部ケゴール県の保健所で保健師として活動中の長部千寿隊員は、日本の自治体からの現職参加。食生活からくる生活習慣病の改善に使命感を持って取り組んでいる。30分の予定で話をしてもらっていたが、医療関係で協力隊員を目指す団員の熱い視線を浴び予

定の倍の時間、協力隊参加までの道のりと現在の活動について話をしてくれた。

二人の協力隊員活動現場訪問やJICAスリランカ事務所でのブリーフィングを通じて団員は、青年海外協力隊事業について理解が深まると共に、将来の進路の一つに加えたようである。

中学一年生から高校三年生までの15名。誰一人現地で体調を崩すことなく、予定のスケジュールをより充実した実りの多い内容にした15名を頼もしく感じた。そしてそれを支えた同行者3名。パスポート、お金の管理そして音響担当の徳田さん、先生役として団員を先導した林さん、健康管理の傍らで記録係の上野さん。素晴らしいチームワークでした。マスコミから参加の緒方さんと下山さんの精力的な取材活動は、まさにプロの仕事を見る機会となりました。

15名の団員とミーガルラ村の素晴らしい未来に乾杯。



全団員の顔写真入り横幕



村の僧侶と一緒に 本人：前列左から2番目



お別れパーティーにて 本人：2列目左から2番目

# 同行者が感じたこと

## 見覚えのある風景

(公財)鹿児島県国際交流協会  
総務企画課長 德田 洋

「7月にスリランカに行ってもらう」4月の異動が決まり、事務の引継を受けた際の前任者の言葉だ。スリランカに対する予備知識は全くなかったが、中国での駐在経験があったので、不安より好奇心が勝り、早く行きたいと思は募るが、日々の業務に忙殺され、シンハラ語の勉強もままならないまま、出発の朝を迎えた。

中心都市のコロンボから、ホームステイしたミーガルラ村へは、バスで2時間弱であったが、都市部を抜けた道中には、既視感のある風景が広がっていた。車は左側通行で日本と同じだし、輸入されたであろう日本製の中古車が行き交っている。椰子の木が実を付け密生して生えていたりと植生は異なるのだが、鹿児島ほど暑くなく、山あいの緑豊かな風景に、あまり異国感を感じることはなかった。

ホームステイさせていただいたお宅は、周りを緑に囲まれ、広い庭があり、まるで田舎の祖母宅を訪ねたようなそんな雰囲気があった。井戸水のシャワーやバケツの水で流すトイレにとまどいつつも、ベッドを与えられ、それほど不自由を感じることなく、4日間のホームステイを過ごすことができた。朝は、奥さんが入れてくれる甘いティー(ミルクティー)を飲むのが日課になり、食事も3食ともカレーではあったが、具材やスパイスを変え、アレンジされており、飽きることなく食べることができた。

さて、団員はというと、ホームステイ初日の対面式の際は、不安げな様子を浮かべていたが、4日間の間に、思っていた以上に打ち解け、交流を楽しんでいた。シンハラ語に悪戦苦闘しながらも、指さし会話帳をフル活用し、コミュニケーションをとっている姿には、感心した。最終日には、当初ぎこちなかった団員が別れを惜しむ姿が印象的であった。若いうちから、このような異文化体験ができたことは、これから的人生にとって、非常に有益となるであろう。国際交流に携わる身としては、彼らがこれから「鹿児島の国際交流」

を支えていく人材になってくれることを確信した。

同行したガイドは、現在のスリランカは、50年前の日本と同じくらいと説明したが、街の活気は、これから成長を感じさせるものであった。また、インド洋の要衝であるスリランカでは、中国の一帯一路構想を受け、中国資本による都市やホテルの建設などインフラ整備が進んでおり、アジアにおける中国の存在感をあらためて見せつけられたような感じであった。

日本からはるかに遠く、移動にも相当な時間がかかり、過酷な旅程ではあったが、このような貴重な体験ができたことをうれしく思う。快く送り出してくれた上司、同僚をはじめ、共催の各市、協賛企業、また、JICA事務所の皆さん、現地の青年海外協力隊員の皆さん、そして何よりも私たち一行を温かく受け入れてくれたミーガルラ村の皆さんなど、本事業を支えてくださった多くの方々に感謝するとともに、密度の濃い時間を共に過ごした団員及び同行者の皆さんにもお礼を述べたい。



ホストファミリー宅



村の協力者のみなさん 本人：後列右から2番目

## 同行者が感じたこと

### スリランカ体験事業を終えて

青年海外協力隊スリランカ OG 林 裕佳  
(現 クラーク記念国際高等学校 教諭)

スリランカと聞いてどんなイメージが思い浮かぶだろうか？私は以前、青年海外協力隊の日本語教師としてスリランカに赴任していた。スリランカは私の大好きな国である。

今年3月、団長の弓場さんから電話があり、今年度の派遣先はスリランカになるということを聞いた。その時、すぐに「引率したい！」と思った。それは、自分が青年海外協力隊として活動した、大好きな国を子どもたちに見てほしいと感じたからだ。絶対にスリランカの人たちは子どもたちを助けてくれるだろうし、お互いに学び合えるはずである。スリランカが、子どもたちが世界とのつながりを感じるきっかけになつてほしいと思っている。

今回、引率をしていて本当に感心したことがある。それは、子どもたちの可能性だ。初日の夜は不安そうな顔をしていたのに、二日目、三日目にはホストファミリーとこんなことをした、あんなことをしたと話してくれた。自らホストファミリーと関わっていこうというコミュニケーション能力の高さは本当に素晴らしい。また、外での水浴びという日本とは異なる環境で、スリランカ人の方法を自ら真似してみようとする異文化への順応性の高さ。さらには、常に主体的に受け身にならない積極的な姿勢。青年海外協力隊の活動視察において次々と質問する、メモをきちんととるなどの姿勢に意識の高さを感じられるとともに、その姿を見たスリランカ人や隊員が感心していた。

このように子どもたちが安心して滞在し、力を発揮できたのは、ホストファミリーや地域の力によるところが大きい。村での対面式のときのセレモニー、学校交流のときのプラスバンドによるお出迎えなど、本当に村、地域全体でおもてなしをしてくれ、本当に感動した。子どもたちは一気にスリランカが好きになり、スリランカに溶け込んでいこうという力になっていたはずだ。

また、今回の体験事業の中で子どもたちに知つてほしいと思っていたこと。それは、日本の戦後復興を助

けたのはスリランカであるということだ。サンフランシスコ講和会議における、後のジャヤフルダナ大統領の「憎悪は憎悪によって止むことはない。」というスピーチによって日本は分割されなかつたということ。JRジャヤフルダナセンターで子どもたちは真剣に展示物に向き合い、日本とスリランカとのつながりを感じていたと思う。私たちの今の生活は、多くの国々との関わりの上に成り立っていることを実感するきっかけになったはずだ。

この体験事業は子どもたちが自分自身で、様々なつながりを築くことのできた訪問だったと思う。スリランカと日本にお互い顔を思い浮かべられる人がいる。このつながりが、絶対に子どもたちがこれから社会に、世界に飛び出していくときの力になる。さらにいろいろな国々と強いつながりを生み出すことができる力を今回の子どもたちは持つていると思う。

今回、子どもたちとスリランカに行くという貴重な機会をいただき、私自身も本当に学ぶことが多かつた。このような機会を作ってくださった事務局、関係各所の方々に感謝するとともに、参加した子どもたちの今後に期待をしている。



嬉しいサプライズ



村のお母さんたちと一緒に 本人：左から2番目

## 国際協力体験事業に参加して

青年海外協力隊バヌアツ OG 上野 陽子  
(現 十島村役場 保健師)

健康管理員としてスリランカに行くお話をいただいた時、わくわくする気持ちもあったが、いさかためらいがあったことも事実である。何よりも、いまだに Dengue熱や様々な感染症が残っていること。また、普段の仕事上、高齢者との関わりが多く、多感な時期である中高生と関わったことがないこと。団員と上手く打ち解けることができるだろうか…。しかし、そうした難しさがあるからこそ、この事業に参加する意味もある。そう思いこの事業に参加した。

言葉が通じない中でのホームステイ。私は、「きっと壁にぶつかり相談してくる団員がいるだろう。」そう予測していた。団員たちは最初、緊張しているのか笑顔もぎこちなく、口数も少なかったからだ。しかし、その予測はくつがえされた。団員たちは、ぎこちない接近を何度も繰り返すうちに、指さし会話帳やボディーランゲージを交えながら少しずつコミュニケーションを取り始めていた。スリランカの人々と話をするとき団員は、相手の言葉を理解しようと真剣なまなざしで相手を見つめていた。時折、声を出して一緒に笑う姿も見られた。思うようなコミュニケーションが取れず不安そうな表情を浮かべていた先ほどから、そう時間も経っていないのに、いつの間にか自分のペースで人々と関係を築いている様子を見たとき、私は団員の潜在的な能力の高さに気付かされた。団員たちは心と心でつながる方法を見つける力を持っていたのだ。

旅も終りに近づいた頃、ある団員がこう言った。「この国の人にとって、幸せってなんなのだろう。」…この言葉を聞き、その人々が幸せなのかどうかを自分の視点だけで考えるのではなく、相手の視点にたって考えようとしているのだとわかった。「国際的である」とは、外国語に通じていることでも、海外の生活習慣に詳しいことでもない。自分とは違う立場、それも複数の、しばしば対立や矛盾をはらむ立場を理解する感受性を持つこと、より厳密に言えば、その感受性を持つとする意志と忍耐だと私は思う。この団員の心には

その意志があったように思う。きっと、この団員に限らず、多くの団員が同じような思いを抱いたことだろう。わずか8日の間に何という成長を遂げたのだろう。ふと周りに目をやると、あの顔もこの顔も、その目は8日前とは明らかに違っていた。子どもってすごい、子どもの可能性は無限大だ。そう心の底から思えた。刺激を受けた私は、いい年であるが、まだまだ私も、と勝手にパワーをもらっていた。

何よりも、団員が病気や怪我ひとつなく、無事に帰国することが出来て心から安心した。こんなに暇な健康管理員は初めてだそうだ。これも、事前に団員の健康管理に注意して、準備してくださったご家族、事務局の皆様のおかげである。また、弓場会長はじめ、気さくな同行者の方々であったことも非常に救いであった。この事業に関わった全てのみなさまに心から感謝申し上げます。ストゥーティー！



村の子どもたちと一緒に 本人：左から2番目



小学校交流の様子